

横浜 英連邦戦死者墓地からの報告

10月9日午後、米元捕虜家族の皆さんは元気に横浜の英連邦軍墓地を訪問した。POW研究会の笹本、渡辺、手塚、田村の4名が墓地で会った。横須賀米海軍基地から海軍牧師が15名程の若い海軍兵と一緒に参列し、米元捕虜家族達の為に心のこもった式典を執り行った。途中で、家族に起立するよう促し、若い海軍兵達が代わる代わるそれぞれの家族の父親、あるいは祖父の名前を唱えるとその都度、鐘が打ち鳴らされ、辺りに特別な空気が流れた。



その後、皆さんは祖国に持ち帰られなかった48名の米兵の遺灰のある納骨堂に、三々五々花を供えに行かれた。この納骨堂に弔われている米兵は、フィリピンから鴨緑丸、江の浦丸、ぶらじる丸を乗り継いで、やっと日本に到着したものの、既にこと切れた捕虜たちだ。彼らはただちに火葬、他の英・蘭兵等の遺灰と共に合葬された為、戦後は個別に分けることが出来ず、納骨堂に安置された。その名前が壁に国籍毎にパネルに明記されている。

式が始まる直前、牧師さんから時間を頂き、POW研究会がこれまで調べて来た

納骨堂の歴史について話す機会を得た。遺族の方々が遠路はるばる来日した苦勞をねぎらい、今回の旅が心に残るものになるよう、また彼らの父や祖父が経験した不信と敵意ではなく、この世が平和と友情に満ちたものになるよう祈念すると、拙い英語で話した。この日、一行はその後の予定が入っていなかった為、墓地での時間をゆっくり過ごした。その為、多くの方に話を聞く時間に恵まれた。天気も良く、一行は日本の旅の幕開けを楽しみ、これからの旅に大いなる期待を寄せていた。

(田村佳子)

英連邦墓地で参加者の方々から聞いたお話

★ キャロリンさんの娘、キャシーさんの話 ★

祖父の再埋葬のことは2001年の開示記録で分かり、その後の調査もあり、今年8月、ハワイのバンチボウルに遺族らにより慰霊碑が建設された。その式典に家族、ひ孫も含め4世代32名が参加してきた。この日は非常に感動的な一日だったと孫のキャシーさんは話してくれた。

キャロリンさんはアメリカから非常に機能的な電動バイク形式の車椅子で来日。横浜保土ヶ谷の墓地でも、周りの人達の世話を断り、1人悠然とスロープも登り降りしていた。「何と自立し勇敢なお母さま！」と話しかけると、キャシーさんは「あんな風に何でも一人でこなすから、世話がいらぬの」とにっこりした。バンチボウルの式典ではもう一つ素晴らしいことが起きたの、とキャシーさん。「あの直後に日本に行かないかと突然言われたの、そして母は私を介添え人を選んでくれたの。急なお話、でも飛び上るほどにうれしくて大急ぎで旅支度をしたわ。」と話してくれた。

★ ジェイムズ・ライトさんの話 ★

ジェイムズさんは杖も不要で非常に若々しく、能弁な方で、九州で古牧さんの案内を楽しみにしていると話した。父親のウィリアムさんは捕虜としてバターン死の行進を経験したが、他の捕虜達が言うほど日本兵からのひどい仕打ちは受けなかったと家族に話していた。捕虜時代のどんな話を聞いたか問うと、フィリピンでの収容所生活は長かったが、日本は最後の一年のみ。もともとあまり体験を話さない父だった。軍属の監督たちは捕虜を人間的に扱い、殴られたり罵られたりすることは無かった。戦後、解放されて赤十字の救恤品配布や補給物資投下が始まるとそれらの品を優しくしてくれた日本人たちに分けてあげたい。それは捕虜たちも日本の一般人が困窮生活を強いられているのを知っていたからだ。タバコは生涯吸わなかったので、タバコで物々交換するのに大いに役立っていたらしい。帰国後、体の調子が悪く、病院生活が続いたが、仕事もし、戦友たちの現住所を調べ、連絡を取ることに情熱を燃やした。桂川炭鉱は閉山して何も無いことを知っているが、父の見た山や田園風景を見るのを楽しみにしていると、爽やかに話してくれた。

★ デイビッド A. トッピング ジュニアさんの話 ★

父は米原収容所に 200 名の捕虜と共に移動した。解放後、補給物資が届くようになったことは大変な喜びと安堵であり、嬉しさのあまりにたばこを一度に 3 本ふかし、同時に左手でチョコレートをつかみ口に入れる、そんな生活で戦争終結をかみしめたと話していた。戦争体験については、私にはよく話してくれたが、他の兄弟にはあまり話さなかったらしい。話はフィリピンでの生活が長かった分、主にそこでのことが多かった。体験談は楽しいことは無く、辛く苦しかったことがほとんどだった。父の日本での思い出は最後は大きな湖の近くにいたという記憶。ここに数日後に訪ねるのを楽しみにしていると語った。(トッピング・ジュニア氏の名刺には、父がいた全ての捕虜収容所が印字されていた。)

★ リンダ・アンダーソンさんの話 ★

父とは 3 歳の頃に別れ、あまり話を聞いていないが、成長してまた再会したころに聞いた話として、捕虜達は帰国後ただちに、捕虜時代にあったことを決して公言しないよう、書類に署名させられ、その書類は今も残っている。今回の招聘者の中で他にも同様の話を聞いた。夫のデエイブと神岡を訪問するのを楽しみにしている。また、ADBC で知り合った西里さんと夕刻に会うのを楽しみにしていると話していた。

(聴き手：田村佳子)